

## 幼児期の問題行動・心身症の経過

### - 入園時の不適応行動の検討 -

(分担研究：小児の心身症に関する研究)

森永良子<sup>1)</sup> 林 洋一<sup>1)</sup> 田村和子<sup>1)</sup> 前 典子<sup>2)</sup>

要約：分離不安に伴う問題行動・心身症は保育園、幼稚園入園時にしばしば生じる。新入園の園児320名（♂160、♀160）について担任が10日間観察した結果、68%の園児に不適応症状がみられた。5月連休明けにはそのうちの70%が適応している。不適応症状は男子に有意に高かった。また発達の変因（生まれ月、3才と4才）と関連する症状が認められた。子どもに対する評価は、親と担任の間に差があることが明らかになった。

見出し語：問題行動、心身症、不適応行動、登園しぶり

#### 研究目的

幼児は発達が未分化であり、言語表出が未熟であるために心理的なトラブルにより、行動ならびに身体に症状を生ずる。幼児にとって、母親・家族との分離は、心理的外傷であるが、幼児はこの経験を経て状況を理解し、第2次集団である家族以外の集団に適応していく。

ここでは、幼児がもっとも一般に経験する幼稚園・保育園の入園時の分離不安がどの様に幼児に影響を与え、日令によりどの様に変化するかの経過を検討する。入園時に多くの幼児が一過性に行動に変化を示し、登園しぶりなどがみられることは、幼稚園、保育園の担任によって経験されてい

るが、これらの症状は短期間で消失するのが一般的である。しかし、中には入園時に示された問題行動、心身症はその後、反復されるケースもあり、学童期に続くものもある。学童期の不登校に幼児期の幼稚園、保育園での不適応を引き続きもつものもあり、不適応症状は入園児の一過性症状とすることには問題もある。1997年度は担任による後方視的調査を行ったが、今回は入園時より担任による観察調査を行い、その変化する過程、症状に係わる要因についての分析を目的とした。

近年、幼児の集団志向は、年少化し、3年保育は一般化し少子化傾向の中で低年齢化は強まる傾

1) 白百合女子大学発達臨床センター

2) 日本女子大学付属豊明幼稚園

向にあり、幼児期の集団への適応の問題は今後の課題である。

増加傾向にある不適応の問題として、不登校が教育をはじめ医学領域でも心身症との関連で研究されてきたが、その多くは親の養育態度と子どもの自我の形成の歪み、学校教育のあり方、背景にある学歴社会の影響、少子化等の子どもを取り巻く環境からの検討であった。子どもの持つ特性についてからの視点での研究は少ない。

幼稚園、保育園は幼児にとってはじめての集団生活であり、入園時には泣く、不安で機嫌が悪くなる、拒否するなどの症状を示す傾向がある。親にとっては子どもを手放すことは不安でもある。はじめての親からの自立でもある大切な時期に示す子どもの症状に対して、親と教師は子どもをどのように観察し、評価しているかもあわせて考察する。

#### 研究方法

①対象児：千葉県にあるS園146名（♂81、♀65）、東京都R園76名（♂34、♀42）、N園98名（♂45、♀53）。表1参照  
S園は千葉市の郊外にあり、3才1クラス、4、5才は各々3クラス、全園児259名以上である。

表 1

年齢		男	女	計
3歳児	新入	59	74	133
4歳児	新入	45	57	102
	在園	56	29	85
	計	160	160	320

R園は杉並区の住宅街にあり、3、4、5才児各々2クラスからなる少子化傾向の進んだ地域の

100名前後の幼稚園である。

N園は幼稚園は共学であるが、小、中、高、大学までの女子の一貫教育機関の幼稚園である。

#### ②保育者の観察による調査

##### a) 入園時の観察

・期間：1997年4月入園より2週間（10日）全員。問題を持つ園児は入園時より4週間。

・手続き：担任により12項目について、毎日の観察を行う。

・分析方法：2段階評価を行った。第1項目のみは逆転項目である。発達の差をみるため、3才児新入、4才児新入、4才児在園の3グループで性別、新入・在園、生まれの3要因の分散分析を行った。問題行動を因子分析し、身体症状、その他の要因との関連、ならびに問題が継続する子どもについて検討した。

・観察項目：1997年の担任による入園児の適応状態の調査に基づき、不適応症状として担任が観察しやすい12項目を設定した。（表2）

表 2

#### 10日間全体の比率

①喜んで来る（逆転項目 喜んで来ない）	171人	53.4%
②泣いて嫌がる	36人	11.3%
③めそめそ泣き続ける	32人	9.9%
④親から離れられない	24人	7.5%
⑤我慢できず、自分勝手 な行動をする	31人	9.6%
⑥乱暴する	18人	5.6%
⑦担任から離れられない	33人	10.6%
⑧先生になじまない	24人	7.5%
⑨友達と遊べない	48人	15.2%

⑩食事が食べられない	6人	1.9%
⑪話をしない	33人	10.6%
⑫着席できない	36人	9.9%

#### b) 保育者へのアンケート

- ・対象者：担任
- ・手続き：4月にみられた不適応症状がいつまで続いたか、幼稚園でみられる身体症状について記入
- ・期間：1997年10月中旬
- ・分析方法：入園時の問題行動の因子項目得点を用い、身体症状との関連を分散分析で検討。長く不適応症状を示す子ども、また途中から出現した子どもの原因を検討。

#### ③親へのアンケート

- ・問題行動9項目（7項目は保育者と同じ項目、母親の不安、4月に生じた身体症状、乳児期からの身体症、あそび経験、他）
- ・対象者：母親あるいは父親
- ・期間：1997年7月中旬
- ・分析方法：保育者の分析と同様

#### 結果

##### I、保育担当者による観察の結果

1) 入園時に、12項目について観察された子どもは68.2%であった。

①喜んで登園しない・・・第1日目45.5%と約半数の子どもに担任により観察されている。しかし、10日目には75%が、積極的に参加し、喜んで登園するようになっている。

⑥がまんできず、自分勝手な行動をする、⑫着席できないの2項目以外は4日目までの比率が高いが5日以降に減少している。10日間全体の比率は(表2)である。

##### 2) 3才児新入園、4才児新入園の要因

年齢×性別×生まれの3要因の分散分析の結果は次の通りである。

- ①喜んで登園しない・・・年齢、生まれの主効果が有意であり、4才児の方が3才児より登園しぶりの傾向があった。(p<.05)
  - ②泣いて嫌がる・・・年齢×うまれの交互作用が有意であった。(p<.05)
  - ④親から離れられない・・・4才<3才(p<.01)
  - ⑧先生になじまない・・・4才>3才、4才女子が4群の中もっとも多かった。(p<.05)
  - ⑨友達と遊べない・・・4才>3才(p<.05)
  - ⑩食事が食べられない・・・4才>3才(p<.05)
- ⑤、⑥、⑦、⑪、⑫は有意差が認められなかった。

##### 3) 4才新入園児と4才在園児との比較

新入在園×性別×生まれの3要因の分散分析の結果、新入園児に高い項目は以下の通りである。

- ①喜んでこない。新入園>在園、(p<.001)
- ②泣いて嫌がる。新入園>在園、(p<.05)
- ③めそめそ泣き続ける。新入園>在園、(p<.05)
- ④親から離れない。新入園>在園、(p<.05)
- ⑫着席できない。新入園>在園、(p<.1)

##### 4) 生まれによる要因

- ⑦担任から離れない。早生まれ、(p<.05)
- ⑨友達と遊べない。早生まれ、(p<.1)

##### 5) 性差による要因

- ④親から離れない。新入園の男>新入園の女、(p<.01)
- ⑤がまん出来ず、自分勝手な行動をする。男>女(p<.05)、⑥乱暴する。男>女、(p<.05)

1)

## Ⅱ、親へのアンケート

・父母の年齢構成は(表3)である。回収率は88%であった。同胞数は2人が58.4%、1人が26.7%、3人が13.9%、4~5人が1.1%であった。

第3表

	父		母	
	N	%	N	%
年齢				
20代	7	2.5	23	8.3
30代	195	70.4	230	82.7
40代	72	26	25	9
50代	3	1.1	0	0

1) ・子どもの遊び経験は多いが47.5%、少ないが41.5%、ほとんどないが11.1%で半数以上が遊びの経験は少ないと答えている。

・幼児期までの大きな病気の経験は10.6%であり、0才代3.2%、1才代3.2%、2~3才代3.9%、4才0.4%であった。

・育てやすさについては、育てやすかったは148人(52.7%)、普通107人(38.1%)であった。

・入園時の母親の不安は(表4)である。約半数

表 4

### 母の不安

	N	%
安心していた	86	30.6
やや不安	145	51.6
不安	41	14.6
その他	9	3.2

以上が何らかの不安を持っていたと言える。

・生活習慣についての母親の評価は次の通りで

表 5

生活習慣項目	はい		時々		いいえ	
	N	%	N	%	N	%
しっかり食事をする	197	70.1	77	27.3	7	2.5
着替え自分で	209	74.4	69	24.6	3	1.1
寝付きよい	240	85.4	31	11.0	10	3.6
排泄は1人で	254	90.4	24	8.5	3	1.1
1人で支度	177	63.0	96	34.2	8	2.8

2) ・親(主として母親)からみた入園時の適応状態

### 親から見た子どもの適応状況

- ①喜んで登園(喜んで来ない) 38.4%
- ②不安で登園をしぶる 26.3%
- ③泣いて嫌がる 16.7%
- ④親から離れられない 17.8%
- ⑤落ち着かない 7.5%
- ⑥友達と遊べない 12.8%
- ⑦食事が食べられない 6.8%
- ⑧眠れない 4.3%
- ⑨支度がおそい 23.5%

保育者と同じ項目は9問中7問であり、この項目を保育者と比較すると①喜んで登園しない、②登園をしぶる③泣いて嫌がる。④親からはなれないなどの分離不安の症状は担任の評価より高く、これらの問題を示した子どもは57%であった。

3) 3才児新入園、4才児新入園の比較

②不安で登園をしぶるで性別の主効果が有意、男>女、(p<.05)、⑥友達と遊べない、男>女、(p<.1)、支度が遅い、早生まれ、(p<.05)

4) 4歳児新入、4才在園児の比較

①喜んで登園しない 男>女、(p<.1)  
⑥友達と遊べない 男>女、(p<.05)

在園の早生まれ、(p<.05)

以上、担任の観察に比較して、年齢、新入園・

4月(入園時)に起きた身体症状 数(%) 乳幼児期から現在まである身体症状 数(%)

身体症状	性別	3歳	4歳	小計	計	3歳	4歳	小計	計
指しゃぶり	男	2	4	6	13(4.6)	12	9	21	45(16.0)
	女	4	3	7		11	13	24	
つめかみ	男	1	2	3	10(3.6)	1	7	8	21(7.5)
	女	3	4	7		8	5	13	
タオルを離さない	男	1	0	1	1(0.4)	11	10	21	35(12.5)
	女	0	0	0		6	8	14	
親から離れない	男	4	2	6	7(2.5)	4	1	5	9(3.2)
	女	1	0	1		3	1	4	
不安がつよい	男	2	2	4	9(3.2)	1	2	3	8(2.9)
	女	4	1	5		2	3	5	
幼児語	男	0	0	0	1(0.4)	4	5	9	21(7.5)
	女	1	0	1		6	6	12	
落ち着きがない	男	0	0	0	2(0.7)	3	6	9	15(5.4)
	女	2	0	2		2	4	6	
注意集中困難	男	0	0	0	0(0)	0	4	4	7(2.5)
	女	0	0	0		1	2	3	
固執	男	0	0	0	1(0.4)	3	5	8	13(4.6)
	女	1	0	1		3	2	5	
下痢しやすい	男	0	0	0	1(0.4)	0	1	1	2(0.7)
	女	1	0	1		1	0	1	
腹痛、頭痛	男	1	0	1	1(0.4)	0	1	1	3(1.1)
	女	0	0	0		1	1	2	
風邪ひきやすい	男	2	1	3	7(2.5)	6	7	13	19(6.8)
	女	3	1	4		1	5	6	
アレルギー、喘息、アトピー	男	0	0	0	0(0)	8	21	29	47(16.7)
	女	0	0	0		10	8	18	
ひきつけをおこす	男	0	0	0	0(0)	1	0	1	1(0.4)
	女	0	0	0		0	0	0	
夜起きて泣く	男	1	0	1	2(0.7)	2	4	6	12(3.9)
	女	1	0	1		3	3	6	
夜尿	男	0	1	1	4(1.4)	10	8	18	36(12.8)
	女	2	1	3		8	10	18	
頻尿	男	1	2	3	4(1.4)	0	0	0	0(0)
	女	0	1	1		0	0	0	
遺尿	男	0	0	0	2(0.7)	1	0	1	2(0.7)
	女	1	1	2		0	1	1	
遺糞	男	0	0	0	0(0)	0	0	0	0(0)
	女	0	0	0		0	0	0	
吃音	男	0	1	1	1(0.4)	0	2	2	7(2.5)
	女	0	0	0		2	3	5	
チック	男	0	0	0	0(0)	0	1	1	1(0.4)
	女	0	0	0		0	0	0	
計	男	15	15	30	$\bar{X}=0.22$	64	93	157	$\bar{X}=1.15$
	女	24	12	36	$\bar{X}=0.24$	65	75	140	$\bar{X}=0.96$
計		39	27	66		135	169	304	
	$\bar{X}$	0.32	0.17			1.11	1.05		

### そだてやすかった子どもと身体症状

	育てやすい	普通	育てにくい
N	148	107	26
$\bar{x}$	1.06	1.29	1.65 *
S. D.	1.27	1.21	1.57

\*p<.05

在園の差はみられず、性別、生まれの差がみられた。母親は、男、早生まれに問題があるととらえている。

### Ⅲ、身体症状と心身症

#### 1) 入園時の心身症

4月入園時に身体症状をもった子どもは45名であり、全体の16%であった。この中、心身症は11名である。乳幼児期から現在の身体症状がある子どもは165名(58.8%)である。

(表7)

#### 2) 入園時の身体症状と各要因

性別、年齢、生まれの3要因の分散分析の結果、新入・在園×性別の交互作用が有意であり(p<.05)、新入園男、在園女が多い結果となった。入園時に症状があった群とない群を母親の不安得点によりt検定を行った結果、有意差が認められ、症状ありの群の母親の不安が高かった。

#### 現在身体症状あり群、なし群の母の不安

	現在なし群	現在あり群
N	116	164
$\bar{x}$	0.75	1.01 **
S. D.	0.70	0.80

\*\*p<.01

・乳幼児期に大きな病気をした子としない子の現在保有している症状数との関係は以下のとおり。

#### 現在保有している症状数

	病気なし群	病気あり群
N	251	30
$\bar{x}$	1.12	1.9 **
S. D.	1.25	1.42

\*\*p<.01

#### 4月に身体症状あり群、なし群の母親の不安

	4月なし群	4月あり群
N	236	45
$\bar{x}$	0.83	1.31 ***
S. D.	0.73	0.85

\*\*\*p<.001

### 考察

#### 1、入園時の問題行動について

・入園時、12項目中何らかの問題行動を示す子どもは約70%であった。しかし、全体の半数までは、余り問題なく幼稚園に適應し、3分の2の子どもが5月までに適應することがわかった。これは、昨年の子備調査とはほぼ同じ結果であり、大半の問題行動は、一過性であることが明らかになった。

・出現の比率は低い「友達と遊ばない」の引込み思案因子項目は、分離不安、不安との関連があり、問題が継続する子に得点が高く、注意の必要がある。また、統計的に有意差はみとめられなかったが、「食事がたべられない」子どもの6名中3名が現在まで不適應が継続している。

・「喜んでこない」は、入園当初、半数以上が示した、行動である。後から不適應を示す子どもが此の問題を持つこと、不適應が継続する子どもが、

この項目と他の問題行動を併せ持つことから、不適応を見る上で、大切な観点といえよう。この症状が長引く場合は、配慮が必要であろう。

・問題の傾向として、3才児は「親からはなれない」などの分離に関する問題行動を示すのに対して、4才児は「喜んで来ない」、友達と遊べない、「先生になじまない」、「話をしない」など、対人関係的な問題を多く示した。3才児は4月当初、一人遊び、平行遊びが多いことから、幼稚園への適応は親からの分離が鍵となる。一方、4才児は自己意識の発達とともに、人との葛藤、緊張を感じやすい時期であり、幼稚園への適応が、教師、友人との対人関係の上で成立していくことが推察される。

## 2、保育者と親の子どもの見方の違い

・親の「不安で登園をしぶる」、「泣いて嫌がる」、「親から離れられない」の比率は保育者より高い結果であった。親が自分の子どもを客観的にみる難しさが関連していると考えられる。

一方、保育者の分離不安因子で問題ない群（途中から不適応、現在なし）が、親の分離不安因子でもっとも高い結果であった。保育者にはみえない行動を母親が心配していることは考慮しなければならない。反対に「友達と遊べない」、「喜んで来ない」など、他の子どもとの関係で捉える項目の比率は親のアンケートでは低くなっている。幼稚園では、親にはとらえられない子どもの問題が観察され、それが一つの適応の指標となる。

・母親が男児の問題行動を女児より多いと捉えている結果が示された。母親の不安は男児に高い。これは、母親が女児よりも男児に期待が高く、心配、問題視が強いこと、また男児の方が女児より

発達の幅が広く、乳児期から多彩な問題を示しやすいため、母親の見方、関わり方に違いが現れると考える。

## 3、身体症状と問題行動

入園時に身体症状を起こした子どもは45名（66症例）で7名に1人は何らかの身体症状をおこすことがしめされた。しかし、半数以上が問題なく適応していることから、多くは一過性で問題性の低いものといえる。

入園時、心身症を示した11名の子どもは保育者からも親からも、不適応の報告が少ない。11名中7名まではあまり問題なく適応していると評価されている。入園時に過剰適応している可能性が想定される。一方、乳幼児期から現在まで、何らかの身体症状を保有している子どもは半数以上みられた。乳幼児期からの身体症状は入園時に現れた身体症状とはその背景要因が異なり、入園時の分離不安からのストレス以外の要因が考えられる。とくに問題継続群は夜尿3名、夜起きて泣く2名、吃音2名で子どもの持つ何らかの素因、家庭環境、養育態度の影響が考えられる。

## 4、問題の継続とその要因

### (1) 問題が継続した子ども

問題が継続した子どもは9月まで約15%、そして10月までが約13%であった。10人中1人は問題が残っていることになる。現在まで問題が残っている群は分離不安、行動コントロール困難、引っ込み思案因子が他の群に比べて高い傾向がみられた「我慢できずに自分勝手な行動をする」、「着席できない」などの行動コントロール困難の問題は現在まで問題がある群の特徴だが、これは男児に多い行動でありADHDとしての素

因が関連していることが考えられる。

(2) 途中から問題が起きた子ども

途中から不適應の問題があった群は、保育者のチェックリストで4月の適應の問題がない。その中には親からの問題報告がない子どもがあり入園時の過剩適應が推察される。

おわりに

幼児は分離不安、対人不安を重ねながら集団への適應を学習していく。その症状は、担任の觀察する軽度の「喜んで登園しない」から泣いて嫌がると幅は広いが何らかの反応を示すのが自然である。入園時に心身症を示していた幼児の中に、入園時の不適應症状、すなわち、担任、親が觀察できる症状がみられていないのは、過剩適應が推定できる。また、入園時には問題なく、入園後に不適應症状を示すのも同じ原因と考えられる。多くの幼児にとって、幼稚園、保育園の入園は初めての集団参加であり、その後の集団適應の鍵となる経験であるだけに保育者の觀察と配慮は重要である。

また母親の不安要因が子どもに与える影響が大きいことから、親に対しての子どもへの情緒の発達についての教育が集団参加する子どもへの配慮として必要と考える。

(了)

文献

- 吾郷晋浩・生野照子・赤坂徹(編著) 1992  
小児心身症とその関連疾患 医学書院
- Cambell, S. B. 1995 Behavior problems in preschool children-a review of recent research. Journal of Child Psychology and PSYCHOATRY, 36, 113-149
- Claude, G. Frank, V. Richard, e. t. 1992. Parent-teacher agreement on kindergarteners 'behavior problems': research note. Journal of Child Psychology and Psyciatry, 33, 1255-1261
- 星加明德 1994 こどもの心身症 心身医学 34(3)
- 児玉省・中村孝・上村菊朗他 1983 省8に  
の問題行動 医歯薬出版株式会社
- 宮本信也他 1997 幼児の正確行動特徴と心  
身症様症状、平成8年度厚生省心身症害研究  
効果的な親子のメンタルケアに関する研究 1  
71-179
- 森永良子・前典子・田村和子他 1997 幼児  
の不適應と心身症 平成8年度厚生省心身症害研  
究 効果的な親子のメンタルケアに関する研究  
206-213

PROBLEM BEHAVIOR IN YOUNG CHILDHOOD AND  
PROCESS OF PSYCHOSOMATIC DISORDER

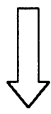
A review of maladjustment behavior upon entering  
daycare, nursery or kindergarten

Separation anxiety in young children is often observed when the child enters daycare, nursery or kindergarten. In this study, 320 children (age 3 or 4, ♂160, ♀160) are reviewed for the separation anxiety. sixty-eight percent of them showed some kind of separation anxiety symptom. But the symptom disappeared within a month with 70% of them. Male showed significantly higher appearance of the symptom. Developmental factors such as the age of the child and also the grade are related to it. Parents' and teachers' evaluation of the child differed.





**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:分離不安に伴う問題行動・心身症は保育園、幼稚園入園時にしばしば生じる。新人園の園児 320 名( 160、 160)について担任が 10 日間観察した結果、68%の園児に不適應症状がみられた。5 月連休明けにはそのうちの 70%が適應している。不適應症状は男子に有意に高かった。また発達の要因(生まれ月、3 才と 4 才)と関連する症状が認められた。子どもに対する評価は、親と担任の間に差があることが明らかになった。